科学研究費助成事業（基盤研究（Ｓ））公表用資料
〔令和２(2020)年度 中間評価用〕

平成３０年度採択分
令和２年３月３１日現在

尊厳概念のグローバルスタンダードの構築に向けた理論的・概念史的・比較文化論的研究

Towards a global standard of dignity as a philosophical concept: theoretical approaches, conceptual histories, and cross-cultural comparisons

課題番号：18H05218

加藤　泰史（KATO, YASUSHI）

一橋大学・大学院社会学研究科・教授

研究の概要（４行以内）
尊厳は規範的概念として現代社会のキーワードの一つになっている。本研究は従来の欧米中心であった尊厳解釈に対して、理論的・概念史的・比較文化論的なアプローチで非欧米圏の議論を繰り込み、社会の民主主義化および多元主義化を推進できるような、多様性を踏まえた普遍妥当的な尊厳概念のグローバルスタンダードを日本から発信することを目指す。

研　究　分　野：哲学・倫理学

キ　ー　ワ　ー　ド：尊厳、人間の尊厳、人権、生命の尊厳、自律、価値論、哲学、応用倫理学

１．研究開始当初の背景

第二次世界大戦後、全体主義のもたらした強大なカタストロフィーに対抗する概念として尊厳は再認識され、「国連憲章」（１９４５年）以降、「日本国憲法」や「ドイツ連邦共和国基本法」などの各国憲法典、さらに近年の「国連 GC」や「EU 憲法」、「障害者権利条約」など現在に至るまで尊厳概念の重要性は国際的に大変高まっている。しかも、最近では、脳死・臓器移植・ES 細胞研究・iPS 細胞研究・ゲノム編集などの先端医療技術の社会的受容とともに、AI 革命やロボット技術などの先端科学技術の社会的受容の両コンテクストで尊厳が問題となっている。これに加えて、移民・難民問題、マイノリティー問題、格差社会などといった現代の多種多様な社会問題は、直接間接を問わず尊厳ないし尊厳の毀損に深く関わっている。その意味で尊厳は規範的概念として現代社会のキーワードの一つになっていると言える。

２．研究の目的

本研究プロジェクトでは、1 の問題状況を踏まえて尊厳概念を多角的な観点から総合的に分析した上で、従来は欧米中心であった解釈に対して、非欧米圏の議論を適切に繰り込んで、社会の民主主義化および多元主義化を推進できるような、多様性を踏まえた普遍妥当的な尊厳概念のグローバルスタンダードを日本から発信することを目指す。

３．研究の方法

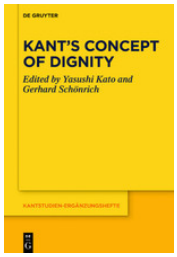
本研究プロジェクトでは、尊厳概念を多角的な観点から分析するために、欧米圏および非欧米圏の様々な学問領域の代表的な研究者が加わった研究グループを形成するとともに、それを欧米関係（哲学・応用倫理学などを含む）担当班・日本関係担当班・中国関係担当班・韓国関係担当班・イスラーム関係担当班・仏教/インド哲学関係担当班の６班に分ける。その上で、（１）価値論的アプローチを採用して、（２）欧米圏の尊厳理解を根本的に再検討/整理する。さらに（３）非欧米圏の尊厳理解を新たに掘り起こすとともに、概念史を構築して、最終的には（４）欧米圏と非欧米圏の議論とを突き合わせて比較し統合して、新たな尊厳理解を定式化する、という手順で研究課題を解明し、現代社会の諸問題に応える。

４．これまでの成果

平成３１年度までに「国際ワークショップ（以下では国際 WS と略記）」「国内研究会」等を開催して現時点での成果を『Kant’s Concept of Dignity』(Yasushi Kato/Gerhard

Schönrich (eds.), De Gruyter, 2019/12) および『尊厳と社会（上・下）』（加藤泰史/小島毅編、法政大学出版局、2020 年 3 月）として取りまとめた。

（1）前者に関して:カントの「尊厳」理解は、現代の生命倫理学や生命医療倫理学から福祉国家論・市民社会論等に至るまでの様々な分野で重要な役割を担うと同時に、欧米圏の「尊厳」概念史においても、また非欧米圏の「尊厳」概念の受容史においても共に最も重要な位置づけを持つ。それゆえに、「尊厳」概念の原理的分析にとってカントの「尊厳」理解を考察することは不可欠の作業である。しかしながら、カントの議論の全体、すなわち、価値論的・理論的次元から、道徳理論的次元、政治哲学的・国家論的次元、社会哲学的次元、国際関係的次元までの議論全体を総合的に検討し分析した研究はこれまで欧米でも試みられていなかった。この点で『Kant’s Concept of Dignity』はカントの「尊厳」理解を全体的に解明する国際的に最初の試みとして位置づけられ、既に欧米の研究者からも高い評価が出版社などを介して届いている。それらによれば、カントの「尊厳」概念を全体的に解明している点と、さらに「A fitting attitude theory of value」という観点を何らかの仕方で踏まえてカントの「尊厳」理解が分析されていると共に、この価値理論がカント哲学によって基礎づけられている点が高い評価を受けている。したがってこれらから、今後この論文集はカントの「尊厳」概念を研究する場合に必須の文献となって大きな理論的影響を与えることになると評価できよう。



（2）後者に関して:障害者やハンセン病者、さらに高齢者、認知症患者等の問題に関して新聞等の報道でも近年では頻繁に「尊厳」概念に言及されている。しかし、その内実は十分に理解も定義もされていない。後者の論文集はこれまでの「国際 WS」や「国内研究会」「国内学会」等での研究発表論文を集大成したものであり、「尊厳」概念の概念史研究・生命政策・環境政策・法/政治制度・介護政策・企業政策といった広範囲の問題を論じている。これは国内では初めての試みであり、国内的には最初の基本文献となる。その点で研究者、報道関係者や現場の専門家等に対して広範な影響が期待できる。この論文集の概念史研究は主に令和元年 11 月に開催された「東方学会」での研究発表に基づき、東アジアの「尊厳」概念史研究が中心となっている。そこに参加していた中国人研究者から、東アジアの概念史は全く空白なので、この論文集が刊行された後にそれらを翻訳したい旨の申し出があった。これらが翻訳されて中国で刊行されれば、この空白を埋める最初の概念史研究として『尊厳と社会』は東アジア諸国の「尊厳」研究に先鞭をつけることになると評価できよう。

５．今後の計画

・ワークショップの開催：令和 2 年度に、東アジアの「尊厳」概念史に関する国際ワークショップ（10 月、京都大）、AI とロボットの「尊厳」に関する国際ワークショップ（11 月、立教大）、第 10 回スピノザ・コネクション（11 月、椙山女学園大）、ゲノム編集と「尊厳」の問題に関する国際ワークショップ（3 月、東大）、「尊厳」とリベラリズムの問題に関する国際ワークショップ（3 月、一橋大）を開催する。令和 3 年度以降に「難民・移民の尊厳」・「障害者の尊厳」・「高齢者（認知症患者を含む）の尊厳」等に関する国際ワークショップを企画し開催する予定である。

・論文集の出版：令和 2 年度にスピノザ・コネクションの日本語論文集を企画・編集を具体化させる。英語論文集の第 2 巻を企画し、開催した国際ワークショップの議論に踏まえ編集作業を開始する。令和 3 年度以降も順次に研究会の成果をまとめ、尊厳問題と関連するテーマの英語版および日本語版の論文集を企画・編集し、完結させる。

６．これまでの発表論文等（受賞等も含む）

「公共と尊厳―一つの見取り図」、加藤泰史、『思想』、査読無、1139 巻、7–28、2018 年 12 月 3 日.

「人間の尊厳と人文社会科学の挑戦―原爆被害者「生活史調査」を中心に」、後藤玲子、『尊厳と社会』（下）、査読無、3–30、2019 年 11 月 6 日.

「日本の思想における尊厳と尊貴―世界における人間の位置」、清水正之、『尊厳と社会』（上）、査読無、17–47、2019 年 11 月 14 日.

「中国近代の尊厳概念―魯迅の小説を通して」、牧角悦子、『尊厳と社会』（上）、査読無、232–246、2019 年 11 月 24 日.

“Kant’s Theory of Dignity: A Fitting-Attitude Analysis of a Value”, Gerhard Schönrich, *Kant’s Concept of Dignity*, 査読有, 49-72, 2018/9/18.

“The Heuristic Use of the Concept of Dignity in Kantian Philosophy”, Yasushi Kato, *Kant’s Concept of Dignity*, 査読有, 231-260, 2018/11/8.

7．ホームページ等

http://www.soc.hit-u.ac.jp/~kato_yasushi/index.html